

Roberts, Michael 2005a Saivite Symbolism, Sacrifice and Tamil Tiger Rites. *Social Analysis* 49 (1): 67-93.

—— 2005b Tamil Tiger 'Martyrs': Regenerating Divine Potency. *Studies in Conflict & Terrorism* 28 (6): 493-514.

—— 2007 Blunders in Tigerland: Pape's Muddles on "Suicide Bombers" in Sri Lanka. *Working Paper No. 32, Heidelberg Papers in South Asian and Comparative Politics*. South Asia Institute, Department of Political Science, University of Heidelberg. (<http://www.sai.uni-heidelberg.de/SAPOL/HPSACP.htm> 2008年10月15日閲覧).

Scarry, Elaine 1985 *The Body in Pain: The Making and*

Unmaking of the World. Oxford: Oxford University Press.

Schalk, Peter 1997 The Revival of Martyr Cults among Havar. *Temenos: Studies in Comparative Religion* 33: 151-190.

—— 2003 Beyond Hindu Festivals: The Celebration of Great Heroes, Day by the Liberation Tigers of Tamil Eelam (LTTE) in Europe. In Martin Baumann et al (eds.) *Tempel und Tempeln in Zweiter Heimat*. Wurzburg: Ergon Verlag.

Tambaiah, Stanley J. 1992 *Buddhism Betrayed?: Religion, Politics, and Violence in Sri Lanka*. Chicago: The University of Chicago Press.

特集 変革期のアジアと宗教

「他者」をめぐる考察

——南タイにおけるムスリムと仏教徒の関係から

ヒラノ リョウ子

西井凉子

一 はじめに

先日、「イスラーム世界における「他者」との共生」と題するセミナー⁽¹⁾に参加した際、そこに出席していたタイ人留学生の発言から、そもそも「他者」とは誰であるのか、宗教が異なることがすなわち「他者」となるのかということについて考えさせられた。彼女はバンコク生まれ、バンコク育ちで、カトリック系の私立学校を卒業しているが、同じクラスにはムスリムの友人もいたという。そのムスリムの友人は彼女にとっては「他者」ではないという。彼女の「他者」をめぐる発言から、セミナーでは「他者」とは誰か、どのようなコンテクストにお

いて「他者」が問題となるのかと議論は展開していった。本論ではそのときに答えの出なかったそもそも他者に括弧をつけて「他者」と問題にするときの「他者」をめぐるコンテクストや、「他者」がどのように問題となるのかというプロセスについて、ムスリムと仏教徒が日常生活のレベルで共存している南タイの事例から考えてみたい。

他者には、自己との関係の違いによってさまざまな他者がありうる。自己と不可分に結びつき、そもそも他者という関係性があってはじめて自己が析出してくるという自己の存立に不可欠な他者もあれば、政治的文脈で敵対関係にあり、その相手を壊滅もしくは消滅させること

が目的となるような他者もあるであろう。おおまかに、

日常生活のレベルと、それを超えるよりマクロなレベルでは異なる他者関係があることは想定できる。ここでは、日常的レベルでの他者関係に対して、政治的、イデオロギー的な硬直した対立関係にある他者を「他者」と括弧つきで区別して議論をすすめたい。後者の「他者」は、往々にして自己に対立する異質性が強調され、逆に自己の側の同質性という二項対立的な対他関係が設定される。

問題は、こうした日常生活における他者が、どのようにして異なるレベルの「他者」に転化するのかということである。つまり、「他者」があぶりだされ、硬直化するプロセスを日常生活の中から解明していくことが必要である。本稿は、そうした解明にむけての第一歩として、日常レベルにおいて、ムスリムと仏教徒が互いに親密な関係を結ぶなかで、いかに宗教の違いを捉え、その違いを生活の中でやりくりしているのかをみてみたい。そこから出発することで、硬直化した他者関係を、共存可能な別の関係へと拓いていく可能性を探ってみたい。まずは、次節においてタイにおけるムスリムの状況を概観す

る。

2 タイにおけるムスリム

タイにおけるムスリムの概況

タイは約六〇〇万人の総人口のうち九四%以上を仏教徒が占めている。ムスリムは、そうした仏教徒が大多数を占めるタイにあつて最大のマイノリティであり、二〇〇〇年のセンサスでは人口約二八〇万人、総人口の約四・六%を占める。ムスリム人口の四分の三あまりが南タイに居住し、中でも南部国境県と呼ばれるマレーシアとの国境に近い四つの県（パタニ、ヤラー、ナラティワート、サトゥーン）ではムスリム人口が県人口の六割から八割以上を占める。タイのムスリムという点、こうした南部タイのマレー系のムスリムの存在がまずは目につくが、タイ国内におけるムスリムの実態は、おおまかに四つのタイプに分けて捉えることができる。

まず第一には、地理的にタイ北部に位置する陸路により中国やミャンマー（ビルマ）の国境を越えてタイに入ってきたチェンマイやチェンライなどに居住するムスリムがあげられる。これらのムスリムは古くはアユタヤ時代にもそのコミュニティの存在が報告されており、インド系、アラブ系、チャム系などさまざまな出自をもつムスリムが混住していることを特徴とする。一八世紀後半にラーマ一世が、また一九世紀前半にはラーマ三世が南タイのマレー系ムスリムを捕虜としてバンコク周辺の運河に沿って定住させ、現在でもミンブリーやノンチョクといったバンコク東部には多くのムスリム集落が見られる。中部タイのムスリムは人口の上ではタイにおけるムスリムの約四分の一をしめ、四六万人を数える。

南タイのムスリムもまた一枚岩では捉えられない。母語及び歴史的経緯の違いで、大まかに二つに分けて考える必要がある。これを第三、第四のタイプとする。

第三のタイプとして、南タイの東海岸を中心としたパタニ、ヤラー、ナラティワートの三県のマレー語を話すムスリムをひとまとまりで考えることができる。この地域では、ムスリムは、国境を越えたマレーシア側のクラ

ムがあげられる。これらのムスリムには、雲南から移住してきた中国系のチーン・ホーと呼ばれるムスリムとパングラデシュやパキスタン、インド系のムスリムが含まれる。前者のチーン・ホーは数世紀前から中国とタイを結ぶ内陸交易に従事してきたことが知られている。その後一九世紀後半、清末におこった「雲南回民反乱」を契機に雲南から陸路でタイに移住し、さらに第二次大戦後に国民党軍の撤退とともにビルマ経由でチェンマイやチェンライなどに流入し、北タイの都市にムスリム・コミュニティを形成している。後者のインド・パキスタン系のムスリムは移住の始まりは一九世紀後半であり、さらに第二次大戦後のインドからパキスタンが分離した時期にやはりビルマ経由で流入したものが多く、集住して集落を形成している [Suthep 1977, 今永 1992, 王 2006]。北タイのムスリムは両系統のムスリムを合わせたも数の上では数千単位でタイの全ムスリム人口の〇・四%にすぎないが、両者とも仏教徒との通婚も多く、タイにおけるムスリムと仏教徒の共存形態のひとつのタイプを示しているといえよう。